

すてきなあなたへ

編集 佐倉市宮ノ台女性井戸端会議

発行 佐倉市宮ノ台4-26-8 tel & fax043-461-7004

佐倉市のムダ遣いは議長専用車ばかりではない

9月29日の「朝日新聞」の声欄に「高額な議長専用車 無駄遣い」という佐倉市の読者からの投書があった。投書は「佐倉市の市議会議長専用車を692万で買うことが9月の補正予算に組まれているのは、緊縮財政の折、無駄遣いではないのか」という警告だった。翌日9月30日の市議会でその補正予算が審議され、翌日の「毎日新聞」によれば「佐倉市議会補正予算案を否決、事業の優先順位巡り紛糾」とあり、ひとまずホッとしたのだ。

10月14日、この補正予算が市議会に再提出されるというので、傍聴に出かけた。傍聴人4名、少しさびしい気がする。市議会開会後ただちに、全議員が参加する「全員協議会」審議となり、大きな会議室に移った。会議室の半分に円形に並んだ全議員、その後ろに市長はじめずらりと部長・課長らが控える。この日は財政課長による、全予算項目の説明が始まる。「おさらい」である。手元に資料も配られているのだから（傍聴人は、終了後回収）、当日の変更案を提案すればよいものを議員はかなりイライラしていたようだ。提案は、前回の臨時市議会でもめた次の2件のみ削除された38件だった。

①市議会議長公用車購入費 692万円

②ふるさと広場駐車場用地購入費 7260万円

①は、投書で糾弾された1件、去年は市長専用車としてより高額な新車に買い替えている。②は、オランダ風車やチューリップ畑に接する農地を駐車場として購入しようというものだ。この購入費の坪単価が相場よりべらぼうに高いという議員の指摘があった件である。いずれも不要不急と言われても仕方ない。38件の中の20件近くが施設の機器の地デジ対応の工事である。今年5月麻生政権のもと成立、バラマキと悪評高かった「地域活性化・経済危機対策臨時交付金1兆円」からの佐倉市への配分額4億1598万円（千葉県では93億1702万円）で充当される事業なのだ。このバラマキがなかったら地デジ対応はどうするつもりだったのだろう。また、施設の老朽化に伴う改修事業費も多く、その実態は解りにくい、いかにも安易な計上に見える。もし、私が「仕分け人」ならば、次の事業などについても担当者に切り込んでみたい。

③中学校コンピュータ利用教育費 3143万円、小学校コンピュータ利用教育費 6579万円

（デジタルテレビ、電子黒板、教務用パソコン等、小中学校あわせて1億円近い）

④くさぶえの丘整備費 5539万円（バラ園の電線地中化、休憩施設、ばら資料館整備等）

結局、佐倉市議会はさらに臨時市議会を経て、上記2件のみを削除して、17億余の補正予算自体を通過させた（予算総額389億余）。

そもそも、「地域活性化・経済危機対策臨時交付金1兆円」の出所は、麻生政権による第1次補正予算の「経済危機対策関係経費」総額14兆7000億円である。そのうちの約10兆円は国債、借金だというのだ。国から自治体に至るまで、その予算の使い方に監視の目を緩めてはならない。行政が選任する「仕分け人」でなく、議会と市民による事業仕分けを佐倉市でも実施してほしいものである。

ロコモティブシンドローム（運動器症候群）を知っていますか

健康寿命を延ばすために鍛えよう！

近頃、体を動かすことが少なくなったせいか、つまずいたり、よろけたりすることが良くある。何か運動でもしなくてはと思っていた矢先、テレビでロコモティブシンドローム(ロコモ)のことを放送していた。

ロコモとは骨や関節、筋肉等の働きが衰えて、そのままにしておくと、寝たきり状態になったりする危険性が高い状態のことだそう。原因疾患には、変形性ひざ関節症、変形性腰つい症、骨粗しょう症があり、これらの症状が1つでもあると、ロコモ又はその予備軍とみなされる。

ある大学の実態調査によると 40 才以上の男性の 84%、女性の 79%にその兆候が見られ、全国で 40 才以上の 4700 万人がロコモやその予備軍と推定されると言われている。

ロコモのチェックポイントは

- ①片足立ちで靴下がはけない。
- ②家のなかでつまずいたり、滑ったりする。
- ③階段を上がるにも手すりが必要。これらの1つでも該当すれば、ロコモの疑いがあると言える。

ロコモの予防や進行を遅らせたりする運動には

- ①片足立ち（左右1分間ずつ、1日3回）： 倒れないように何かにつかまっても良い
- ②スクワット（1度に5～6回、1日3回）： 椅子に腰掛けて、机に手をついたまま、ゆっくり腰を浮かす動作

他にも色々あるが、いずれも関節に余分な負担をかけずに骨を強くし、筋肉を鍛える運動である。健康寿命を延ばすためにも、歳だからと諦めない。若いうちから予防を心がける事が重要だそう。

片足立ちもスクワットも短時間で済むので簡単に思えるが、毎日つづけることが難しそう。

(K)

編集後記 ☆真夏の前号では、読者の皆さんから、この町初めて開店したスーパーへの期待を語ってもらいました。終夜営業への疑問も散見されましたが、11月21日、開店7カ月にして、24時間営業は9時から夜12時までの短縮となりました。大方の予想するところであり、さほど驚かなかったのではないのでしょうか。また、モノレールひと駅先の女子大前のコンビニは、この8月に閉店してしまいました。デフレ、流通業界の冷え込みの直撃だけではないでしょう。生活者の視線を大切にしたい、安心な、実のある「まちづくり」「みせづくり」の基本に立ち返るときがきたのではないのでしょうか。 ☆映画招待席の菅沼さんからは、早くより原稿をいただいていたのですが、発行が遅れてしまいました。皆様も、近頃見た“ちょっといい映画”をぜひご紹介ください。ご寄稿をお待ちしています。 ☆ちょうど帰省中の娘が、Kさんのロコモの原稿を覗き込んで“その場で足踏み”って知ってる？”という。「自分の立ち位置を確認してから、目をつぶってその場で足踏みを50回してみたら」というので、さっそく始めたところ、娘は笑い出し、私も目をあけてびっくり、「ええっ?!」骨盤が歪んでいるようで、スクワット、スワッシュ、腰を回したり、ひねったりが大事とか。「金スマ」で飯島愛が相当な歪み?のあることが分かってしまった由、だいぶ古い話になった。

ノルウェーの女性たち～政治参加への道～

—ムンクもフィヨルドもよかったけれど—

この夏、大急ぎでノルウェーを旅した。オスロの国立美術館、ムンク美術館、ベルゲン美術館での、ムンクの扱いは格別であった。しかし、「叫び」や「マドンナ」ばかりではない、神経症と苦悩に苛まれたムンクの後半生の結実を目の当たりにすることもできた。ノルウェーの風景を描き続けた国民的画家ともいわれるダールや社会の弱者に目を向けたクログなどの作品とも出会えたのは収穫であった。ベルゲンからわずか8キロのグリークの旧居も忘れ難い。

フロムへの鉄道の旅、フィヨルドのクルーズも寒いながら心に残った。左右に迫るフィヨルドの壁、溪谷に注ぐ夥しい数の滝、けわしい斜面の村の人々の暮らし、遊覧船から見上げる雪溪の山々に幾度も声をあげた。

ちょうど日本を出発したのが衆議院議員選挙告示後、選挙戦たけなわの時期だった。ノルウェーでも9月14日の投票日を控え、選挙運動が活発な時期だったらしいが、選挙活動にさして規制がなくとも、日本のような騒々しさはまったくくない。19選挙区に分けた、完全な比例代表制をとるからかもしれない。ただ、ベルゲンのホテル前の広場の架設舞台上で、力強く演説している女性政治家に出会った。内容はもちろん理解できなかったが、その風貌から社会党左派党首クリスティン・ハルヴォシェンであった。この党は、選挙で169議席中11議席獲得し、第一党64議席の労働党と11議席の中央党と連立を組み、過半数ぎりぎり86議席の与党となった。大方の予想に反して、中道左派の連立となったということだ。一時は、第二党41議席を獲得した進歩党女性党首シーブ・ヤンセンは、次期首相候補と目されていたらしい。サッチャーを尊敬し、減税、移民排斥、福祉の民営化を主張していたという。

9月14日、議席数が決まったが投票日の夜、党首が並んだ写真がある。7党のうち4党が女性党首なのである。169議席中66議席39%が女性であった。ノルウェーの女性が参政権を得たのは1913年、日本でいえば大正2年であった。日本では、2008年9月の参議院議員選挙で女性議員は18%と飛躍的に伸び、今年2009年8月の衆議院議員選挙では、小沢ガールズ等と揶揄されながらも、11%に過ぎないのが実態である。女性であればいいのか、の声も聞こえるが、日本は、女性議員の絶対数が少なすぎ、北欧諸国が軒並み35%を超えているのは驚きでもある。

今回のノルウェー選挙の争点の一つは、男女の賃金格差の是正で、その実態は、男性100に対して女性85だという。ちなみに日本の女性は男性と比べて66、男性の3分の2の賃金で働いていることになる。そんなことも思い起こさせる旅となった。(M)



ベルゲン港にて

菅沼正子の映画招待席 No.30

カティンの森

—真実を知らなければいけない—

むごい。なんと残酷な——。戦争の残酷さは、わかってはいるものの、これはあまりにもひどい。しかし、史実なのだ。「カティンの森虐殺事件」である。これまでにアウシュヴィッツの悲劇は多く語られているが、このカティンの森虐殺事件は、事件から 70 年近く経ったいま、ようやくその真相が、少しではあるけれど、明かされるのだ。

カティンの森虐殺事件とは——。第 2 次世界大戦中の 1940 年春、ポーランド人の将校、官僚、教師たち 2 万人以上が行方不明になる。つまり彼らはポーランドの指導者たちで、共産主義の政治教育の受け入れを拒んでいた人たちである。彼らはどこに消えたのか、当初は謎とされていたが、1943 年春、旧ソ連領カティンで、彼ら数千人の遺体が発見される。ドイツはソ連の仕業だと言い、ソ連はドイツがやったと言い、お互いに犯罪を糾弾しあっていた。そして戦後、冷戦時代はソ連の影響下にあったポーランドで、カティンについて語ることはタブーとされていたが、1989 年ベルリンの壁崩壊から 2 年後、ロシアのエリツィン大統領がスターリンの命令下で行われたことを言明したのである。

父親がその犠牲者であったポーランドの巨匠アンジェイ・ワイダ監督は、父親への万感の思いを込めて、この事件の映画化に踏み切ったのである。ナチス・ドイツの犯罪であるというウソ、西側連合国に黙認を強いてきたそのウソについてを物語りたいという。この監督の叫びをしっかりと受けとめてほしい。冒頭の〈両親に捧ぐ〉の文字が胸を刺す。

1939 年秋のポーランド。西からはドイツ軍に、東からはソ連軍に攻め込まれ、群集は右往左往するばかり。アンナ（マヤ・オスタシェフスカ）は大尉である夫のアンジェイ（アルトゥル・ジミエフスカ）を探し歩く。めぐり会えた夫はソ連軍の捕虜に。彼は収容所で見たことすべてを手帳に書き記していく。アンナはアンジェイの両親の家にとどりつくが、大学教授である義父もまたナチス・ドイツに連れ去られてしまう。

抵抗運動をする甥、アンジェイの友人など、さまざまなエピソードが盛り込まれるが、中心になるのは戦争を通しての家族の物語。そしてアンジェイの手帳から再現される映像は、目を覆いたくなるものばかり。およそ 15 分～20 分続くこのシーンこそ事件の真相なのだ。目をそむけず見てほしい。人間は権力を手にすると人間性を失ってしまうのか。

(12 月 5 日より岩波ホールにて公開)

